
人類絶滅

稲垣優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人類絶滅

【Nコード】

N2859I

【作者名】

稲垣優

【あらすじ】

緊急速報です。今から一週間後に、人類が絶滅します。みなさん、思い思いに残りの七日間を過ごしてください。

一週間後、人類が絶滅します。

人間はあと一週間で絶滅する。

この言葉を信じた人間なんていないだろう。人類が滅びるなんて。ましてやあと一週間なんて。そんな馬鹿げた話、三流の映画でも滅多にみられるもんじゃない。

それでも、この地球の人間たちは今まさにその現実と戦っている最中だ。初めは、そんな馬鹿な、と笑っていた人間達も、太陽の爆発がなんとやら、太陽と地球の距離がなんとやら、と必死に説明するニュースキャスターをもう何十回も見ていくうち、もしかしたら笑い事ではないのでは、と洗脳されていく。そして、人類絶滅まであと一週間のカウントダウンが始まったら、だれもかれもが慌てふためき始めた。

なんでも、太陽が爆発するらしい。その爆発のさいに生じる、地球も耐えられないほどの光と熱によって、人間は成す術もなく死にゆくらしい。テレビをつければ、どこかのチャンネルでニュースがやっているで、それを見るのをお勧めする。これまた、イメージ映像やイメージ画などを使っていて、分かりやすいのだ。分かりやすいように説明するもんだから、嫌でも納得させられて、人類は絶滅するのだと思い込まれる。まあ、実際そうなんだろうけどさ。

タイムリミットまで一週間。これは、壊れる世界の中、ただ生きるだけの女と男のお話。

人類が絶滅するまで、あと七日。

一日目 人間が思うほど人間は丈夫ではないのである。

朝起きれば、昨日と全く同じ光景がそこにあった。くだらないなあ、と思つて煙草を吸うためにベランダに出る。道路には、ゴミ、死体、ゴミ、ゴミ。死体をゴミと分類するのなら、その上にはゴミしか無い。そんな光景にも、もう見慣れてしまった。見慣れてしまつてゐるのにも、大分問題はあると思うけど。でも、私はこの世界でまともな方だ。死体を見ながら煙草を吸えるのが、この世界ではまともと分類されるなんてね。変なの。

「美世^{みよ}、はよ」

「おはよー、平和さん^{ひらかず}」

「一本くれ」

「ん」

彼は私が差し出した煙草の箱から、一本とりだした。セブンスターはやだとか言うくせに、いつも私の煙草をもっていく。ちなみに彼はマイルドセブン派だ。

「ん？ 死体増えてんじゃね？」

「え、なんでそんなのわканの？」

「ほら、増えてるって。あの金髪の女」

「やっぱり女関係なんだ」

「あつたりまえだろ。男の死体数えて何が楽しい」

「死体数える時点で正気じゃないよ」

「それ、あの女殺したやつに言つてやれよ。多分彼氏だから」

なんで分かるの？ と思つたけど、あの金髪の女の人が平和さんの知り合いだったことに気付いて、口をつぐんだ。そっか、ミチルさん、世界を終わりを待たずに逝っちゃったんだね。ご愁傷様。そういうえば、あの人の彼氏はまえから誰かを殺したがつてた危ないやつだったつけ。そりゃ殺されるわ。

紫煙を肺に溜め込んで、吐く。吸う、吐く。そんな単純なことを

繰り返して、私の肺は不健康に侵されていく。でも、ま、今更健康に気を使っただけね。長生きできないんだし、無意味無意味。

「お腹すいたなあ」

「もう食いもんねーぞ」

「うっそ、配給所行く？」

「まだ機能してんのかね？　こんなときまではたらないといけな
いなんて、政府の人たちも大変だ」

「まったくだねー」

はは、と笑う。平和さんも煙草を片手に笑っていた。私の吸っていた煙草は大分短くなってしまったので、下に落とした。ちょうど落ちた所にミチルさんの死体があつて、そのお腹と心臓から流れ出していた血で煙草は消えたようだった。

「あ、美世、配給所に行く前に一回やらせろ」

「はあ？　起きたばかりじゃん」

「いいだろ、配給所なんて急ぐもんでもないし」

「急ぐ急ぐ。お腹空いたし、いつまで配給やってるかわかんないし」

「ふむ。一理あるな」

「今ごろ、配給所でみんなして鬼みたいな顔で殴り合ってたりにして
ね」

「在り得る」

平和さんは、煙草をもった右手ではなく、左手で私を引き寄せ、半ば強引にキスをした。右手に持った煙草は、私と同じように下に落とした。何の音も聞こえないけど、たぶんミチルさんの血で消えたことだろう。ありがとね、ミチルさんがこの下で血を流して死んでくれたお陰で、このアパートは火事を出さないでいられそうだよ。なーんて。そんなことを考えるなんて、ミチルさんに失礼？

彼は空いた右手で私の身体を触り始めた。やっぱりするんかい！と心の中でツッコミをいれて、部屋の中に戻ろうってどうやって提案しよう、と口を塞がれたままぼんやりと思った。ボロアパートの二階、右から二つ目の部屋のベランダにて。

人類が絶滅するまで、あと六日。

二日目 人間が思うほど人間は賢くないのである。

なんか、こうなってから人間には馬鹿が増えた気がする。ま、も
とから人間は馬鹿だったけどさ。

のどが渴いたから、水を飲もうと蛇口を捻った。けど、何もでな
い。そうだった。水道、終わったんだった。ちなみに、電気もガス
も終わってる。止まってるんじゃないくて、終わってる。人間が働か
ないから、水道も電気もガスも作れない。だから、家庭にも送れな
い。こうなってから思うけど、先進国の設備って案外脆いよね。こ
んな風に人間を弱体化させる制度を作るなんて、やっぱり人間は馬
鹿だった。

「平和さん、飲み物ある？」

「酒しかねーよ」

「それで良いよ。チューハイとかある？」

「あんじゃね？」

足元の棚をあされば、出てくる出てくる。焼酎。ビール。ワイン。
あ、チューハイ発見。缶ジュースなんかも大量に詰め込まれていた。
え、なんでこんなに大量に買い込んでるの？

「ばーか、そんなに買うわけねーだろ。一瞬で財布が空になるって
の」

「え、じゃ、何で？」

「いち早くこうなることを察知して、コンビニからパクつといたん
だよ」

「あはは！ 犯罪者ー！」

「バレねーよ。バレたってどうしようもねーし？」

「あ、カップ麺もあるー！ 缶詰も！ スナック菓子もたくさん
！」

「俺、準備良いだろ？」

「ほんと。これなら、食料に困ったりしなさそうだね」

「褒めろ褒めろ」

「ラッキー！ これもうよ」

ピンクの缶のチューハイを一つ持って、彼の隣へ戻った。彼は可愛い猫の柄がついてるガラスのコップに透明な液体を注いだ。水なんかこいつが飲むわけ無いし、そもそもあるわけ無いから、どうせ酒だろう。ぷしゅ、と音を立ててプルタブをあける。ごくごくのどをならして飲めば、乾いた身体にアルコールが染みるようだった。昨日配給所へ二人で足を運んだときのこと。配給所と言う存在はもう、すでに跡形も無く消え去っていた。人っ子一人おらず、凄惨な場所になっていたのだ。二人で荒れた公園にあるテントを見て、そして顔を見合わせて、あの冗談がほんとになったね、と笑いあった。声をあげて笑えば、どこからか煩い、という怒号。まだ笑いが収まらず、二人とも肩を震わせながら家路についた。

「なあ、美世、暇」

「うん。だろうね」

「することねーし。ヤロ」

「これ飲み終わってからね」

「あー！ 暇！」

「叫ばないでよー。その辺の漫画でも読んでたら？」

「つーかこれ、俺のだし。全部読んだし」

「ばかものー。単行本を買ったなら、キャラクターのセリフを一言一句すべて暗記できるくらい読まんかー」

「え、それ何キャラ？」

チューハイを逆さまにして飲み干した。ふっても何もでてこない。どうやら、飲み終わったらしい。平和さんを見れば、早くも手を回してきた。まったく、手が早いなあ、この変態。

私と彼は付き合っているわけじゃない。現に、私には彼氏という存在が居たし。ま、こんな騒ぎが起きて、あっけなくもすぐに連絡がつかなくなり、それっきり。どこに行ったのかな。私みたいに誰か他の人間と一緒に居るのかな。それとも、逃げた？ 此処じゃな

い何処かへ？　そうかもな。彼は、昔から臆病で馬鹿で浅はかだったから。

ま、そんなこんなで、暇つぶしにやりたかった平和さんと出会い、住む場所がなくなった私はなんやかんやで一緒に住むことになり。彼と私の考えは似ていたし、このゆるい関係がなかなか心地良かったし、しかも此処には食料がたくさんある。平和様万々歳だ。彼にとってもやりたいときにやれる私の存在はなかなか便利であろう。つまり、二人の利害一致だ。そんな感じで、きっと私たちは最後の時までなんとなく一緒に居るのだろう。

「美世、」

「何？」

「煙草、なくなりそうだな」

「コンビニからパクらなかつたの？」

「パクったけど。計算ミスった」

「全部吸ったんだ。馬鹿？」

こんな風になんでもないような会話を繰り返して、私たちは死ぬのだろう。この地球の上にいるすべてに訪れる終わりから逃れる事も無く。逃れようとせず。なんとなく死んでいくのかな。なんか、まだ実感が湧かないなあ。ほんとに、世界は終わるの？　……って、そんな事考えるだけ無駄だね。既に世界は終わってるようなもんじやん。道路に転がる死体。どこから聞こえる金切り声の喧嘩の声。店という店はだいたい荒らされていて、既にこの日本は政府からも見放された。終わってるよ。この世界でまともなのが、私たちなんて。

この世界で正常なのは、私たち？　それとも、包丁を振り回すあの男？

人類が絶滅するまで、あと五日。

三日目 人間が思うほど人生は簡単ではないのである。

いい加減、暇だ。暇は人を殺せるだろうか。殺せるのなら、私はとつくに死んでいる。まあ、あと四日後にはみんな平等に死ぬので、今死んでも死ななくともたいして変わりはない。

「トランプ。ババ抜き、ジジ抜き、神経衰弱、大富豪、七並べ、ポーカー、ブラックジャック」

「なんの暗号だよ」

「今までに二人でしたトランプのゲーム」

「だいたいさ、二人でババ抜きとか、つまんなすぎるだろ。ジョーカーの押し付け合い？」

「七並べだって似たようなもんだよ」

テーブルの上に散らばっているトランプを眺めて、彼とやろうかどうか悩んで、やめた。どうせ一回で終わる。つまり、トランプなんて飽きたんだ。他に暇つぶしの道具は無いのかと聞いたら、無言で漫画本を指差す。そんなもの、とつくに全部読んだ。もの凄く靈感の強い男子学生が死神になって戦う漫画も読んだし、魂が内蔵されている対人間相手の兵器を壊す少年の物語の漫画も読んだ。つまり、漫画も飽きたし、トランプも飽きたし、やる事ない。暇。ひまー！

「ってか、何やってんの、平和さん？」

「んー？ 漫画本を綺麗に並べてる」

「よっぽど暇なんだね。平和さんって絶対O型でしょ？」

「よくわかったなー。ってかさ、お前すっげー図々しいのに、平和さんって違和感在り過ぎ」

「えー？ だって、多分年上でしょ？」

「そうなのか？ ちなみに俺二十六」

「私二十一だよ」

「マジで？ 全然みえねー」

「うわ、ひど。私、これでも現役大学生だかんね？」

「大学生？ まじで？ 普通に会社員やってると思ってた」

「やだ、私大人っぽい？」

「……というよりは、老けてる」

「さいてー！」

手元にあった適当な雑誌で彼の頭を叩く。バン、と音がして彼のいて、という声が聞こえた。その拍子に一巻から積み重ねていた漫画が崩れたが、私はそれを見てみぬフリをした。いくらなんでも、女の子に向かって老けてるは無い。デリカシーのかけらも無い。

あー、と気の抜けた声をあげて、彼は散らばった漫画本を拾い集める。適当に重ねただけみたいで、表裏や上下はバラバラだった。その辺に適当に置いた。綺麗に重ねるのはもう良いみたい。忍者の少年が描かれている表紙が見えた。続きが読みたかったなあ。どんな風に終わるんだろう。ま、世界がどんな風にひっくり返ったって私はこの漫画が完結したところを見ることは出来ないのだから、想像したって意味が無い。適当に自分の中で最終回を作るだけだ。それしかできない。それで満足するしかない。

「これでもさ、俺なかなか真面目な職業ついてたんだぜ？」

「嘘だ」

「ほんとほんと。当ててみる？」

「真面目なんて、うっそだ！ 信じらんない」

「えー？ 俺、ほんとに弁護士だったんだけど？」

「それこそ信じらんない！ いち早くコンビニから泥棒する人が弁護士になれるわけない！」

「ま、それはそれ。プライベートと仕事はきちんと分けるの、俺」
「だから、プライベートで犯罪起こしてるんでしょ？」

「いいじゃん、別に。もう二度と仕事しないなって誰よりも早く察したの、俺は！」

「んー、まあ、それは正しかったんだけどさ」

「そうそ。だから、今俺たち食べ物に困ってないんだよ？」

「うーん。でも、信じらんない。平和さんが弁護士？」
想像してみる。

スーツをびしっと着こなして、ネクタイ締めて、きちっとしながらテレビみたいな裁判所に座ってて……ダメだ、無理がある。まず、スーツを着ている時点で想像できない。笑っちゃう。弁護士……弁護士。ぷぷっ！

「なんか、それもそれで良いかもね。裁判に緊張感が無くってさ」
「なんだよそれ。俺、仕事中は結構真面目なキャラだったんだからな？」

「昔からこんなセックスの事ばかり考えてる変態じゃないと？」
「そういうこと」

「初めて私に声かけてきた時の事忘れたの？」
「忘れたな」

「痴呆症」

「まだそんな年じゃない」

彼は立ち上がって、カップ麺を取りにいった。カップ麺と言っても、電気が無くてお湯が出来ないし、水道も無いから水も無くて、ラーメンにして食べる事なんて出来やしない。だから、スナックのようにぼりぼりと食べるしかないのだ。まあ、水ならなんとか水道が止まる前に確保しといたし、ライターや燃料はあるから、やろうと思えばお湯を沸かす事もできるのだが、そんな気力私も彼も無い。食べれるんだから、それで良いじゃないか。

残る時間を有意義に過ごそうとしても、いつかどこかで行き止まりができるのだ。水は無いし電気もガスも無いし。こんな生活じゃ、あの日本の生活をした事のある私や平和さんじゃ、満足できるはずも無いんだ。だったら、不便だなんて思わずだらだらと過ごせば良い。

起きて食べて喋って食べてセックスして寝て。それで時間は過ぎていくのだから。

そうやって時間を潰せば、私たちは確実に死の瞬間に近づいてい

く。そして四日後には、はい人生終了！

ほらね。仕事場で真面目ぶらなくても、大学で友達と話をあわせようと努力しなくても、有意義でも、そうじゃなくても、人生なんてみんな同じように終わっていくでしょう？

人類が絶滅するまで、あと四日。

四日目 人間が思うほど神様は甘くないのである。

ぐしゃり、と煙草の箱を握りつぶした。ああ、ついに来てしまった。いつかこんな日が来るとは思っていたけれど、やはり、ダメージは大きい。ついに。ついに、煙草が切れてしまった。

「平和さん、どうしよう、煙草なくなっちゃった」

「げ、マジで？ どうすんだよ？」

「あと三日もあるよ？ 三日間禁煙する？」

「絶対無理！ どちらのコンビニに置いてあんじゃねーの？ 探しに行くか」

「そだね」

そう言っ、彼は立ち上がった。私も立ち上がろうとしたが、今の服装を見て、このまま外へ出て行くことに違和感を感じる。彼はいつもの格好のままビーサンを履こうとしていた。

「ねえ、平和さん」

「ん？」

「このまま外に行くの？」

「あー、嫌か？」

「そうだね、できれば着替えたい」

「まーな、久しぶりだし。着替えるか」

彼は部屋の中に戻って来て、クローゼットの中をあさった。女物の服なんてあったかなあ、なんてぼやいている。まあ、別にいざとなったら男物の服でも良いよ、と一応言っておく。後ろからクローゼットの中を覗いたら、本当にスーツが掛けてあった。それを見て、コレを着て欲しいかも、と思ったけど言うのはやめておいた。だって、このゆるいイメージの平和さんが壊れたらやだし。

「わり、これしかなかった」

「ううん。ありがと」

そう言っ、彼が手渡したのは、細身のジーンパンとティーシャツと

ジャケットだった。ジーパンはともかく、上は男物だった。そうか、そうなんだろうなあとは思ってたけど、平和さん、彼女いないんだな。

と思ったことも口にはださず、着替えた。意外にも大きさはバッチリだった。……ってか、これ誰の服？ どう考えても身長的に平和さんじゃないし。男物だし？

「おい、美世、行くぞー」

「あ、うん」

手を繋いで、階段を下りて。道路へ出れば、酷い悪臭と乾いた血、死体。まったく、改めて見ると、酷い有り様だ。

「臭い」

「まったくだな」

「はー、コレが見慣れた景色だったとはねー」

「世も末だな」

「お、ちよつとうまい」

近所のコンビニへ行けば、入口は割られていた。辺りにガラスが散らばっている。危ないなあ。平和さんはビーサン履いてきたみたいだけど、足切ったりはしてないみたい。そして、中へ入れば案の定、食べ物や飲み物類が置いてあったであろう場所は綺麗に何もなかった。煙草を探せば、運良く新品のセブンスターが三個転がっている。ざっと見る限りではマイルドセブンは見当たらない。

「なんだよ、セブンスターだけじゃん」

「ラッキー」

「一個寄越せ」

「あ、セブンスター嫌いって言ったのに！」

「いいじゃんか、けちけちすんなよ。三日で三箱消費するわけじゃないだろ？」

「まあ、そりゃそうだけど」

しょうがなく一個渡す。ことごとく彼はマイルドセブンに縁がないらしい。ま、結局は彼も煙草の銘柄なんてなんだって良いんだよ

ね。彼はさっそく煙草を開けてライターを取り出した。が、どうやら壊れてるらしく火がつかない。

「ああ、ったく！」

彼は苛立ちながらそのライターを扱い、と投げて別のを探し出した。すると、レジの上にライターを見つけたらしく、嬉々としてそれに飛びつき火をつけた。シュボ、と音がして煙草がジジ、と赤く染まった。

「あー、ライターあってラッキー」

「うん。何だかんだでラッキーだよ」

帰ろう、と言い出したので私もそれに続こうとする。けど、お金を払っていないことに気付いて一万円札をレジの上に置いた。当然のことながら店員なんて居る訳無いし、ネコババしたってバレやしない。でも、そこは日本人としてのモラルの問題だ。

何でも買える魔法の紙切れ。世界が壊れる前には、誰もが血眼になってそれを集めていたというのに、今ではほんとうに紙切れ扱いだ。お店がもう何処にもないんだから、お金があつたって使う場所がない。ほら、がめつい大人の皆さん、そのコンビニのレジに一万円札が放置してありますよ？ そんなこと言っただって、もう誰も金を追わない。紙切れに価値は無くなった。

だって、この世界中の誰もが欲しいものは、金なんかじゃ買えない。それとも神様に命を売ってもらう？ そんなの無駄だ。無理だ。この地球上のすべての人間が知っている。神様なんて存在しない。本当に居るとしたら、人間が壊れてくのを見て楽しんでる悪魔だけでしょ？

人類が絶滅するまで、あと三日。

五日目 人間が思うほど人間は正常ではないのである。

「お、美世、ちょっとこっちこいよ」

私が、謎が主食の魔人が女子高生を巻き込む一風変わった探偵ものの漫画を一巻から読み直していたところ、突然ベランダから声が聞こえた。彼は、ベランダで煙草を吸っている最中だった。二人とも無言だったのに急に名前を呼ばれたものだから、何かあったんだろうと思うとすぐに彼のもとへ向かった。何、と語尾をあげて言えば、彼は無言で下を指差す。その景色になにか変わったものがあるようにはとても見えなかったが、彼がわざわざ私を呼んだのだから、何かあるんだろう。

と言っても、彼の指差す先にあるのは、悪臭のしてそうな死体的道路、信号機、それから無精髭を生やし、ぼろぼろの部屋着を身につけている、不衛生な印象のおじさんだ。ちなみに言っておけば、不衛生に関しては、私も平和さんも人の事を言えない。だって、水が無いからお風呂に入る事も出来ないし。必然的に、そうやってしまふものだ。私にいたっては着替えすらないし。

「何？ あのおじさん？」

「そ。あの人、武藤貴行^{むとう たかゆき}って言うんだけどさ、俺の弁護士仲間」

「あの人も元弁護士だったの？」

「そー。なかなか頭が良い人でさ、家系も医者とかそういう系が多いみたいで、変にプライド高い奴だった」

「へー。ありがちな神経質お坊ちゃんってところ？」

「そうそう。んで、なんか知らないけど、あの人俺のこと嫌いだったみたいで、何かと衝突することが多かったんだよな」

「ああ、明らかにあわなそうだもんね。平和さんのその性格的に」

「いや、だから、俺仕事場じゃ真面目キャラで通ってたんだって。ま、いわゆる演技？」

「騙してたってこと？」

「うーん、微妙に違うかなー……。環境とか、いろいろあるだろう？ 職業柄不真面目じゃやってられないしな。だから、仕事の付き合いでは死ぬほど真面目なやつ演じてたほうが、相手も安心できるし、それで俺も相手もハッピーてわけ」

「うーん……。簡単に言えば、仕事のために仕事上では真面目になった、ってところ？」

「そうそれ！ でもさ、生まれつき真面目なやつにはやっぱ敵わないんだよなー。俺、ずっとペーペーだったし」

平和さんは、煙草を手すりに押し付けて消した。煙が上がりなくなった吸殻を、ぽい、と投げる。それは風に流されて、遠くの方へぽとりと落ちた。

無精髭を生やした武藤貴行元弁護士は、このアパートの目の前にある公園のベンチに座った。そのベンチの上には先約の生ゴミが居たが、彼はそれを足で落としていた。

「んで、一回、笑い事じゃないくらいの喧嘩したことあってさ。いやー、あん時は俺、弁護士辞めることになるかと思ったね。あのオッサンと真面目に話し合いしてさ。結局和解は出来なかったけど。最後のセリフ、笑えるんだぜ？」

「へえ、何？」

「お前は狂ってる」

私は平和さんの顔を見て、三秒固まった。そして、すごく面白いことを聞いたと爆笑し始めた。だって、だって、くるってる、だってさ。それ、今言われたら誰でも笑うと思うよ。

「俺、このオッサン何言ってるんだって思ったんだよなー」

「あはは、おもしろー」

「後から思ったんだけどさー、あの人は俺の真面目っぷりが演技だって分かってたんだよな、多分。だから、俺のことを毛嫌いしてて、狂ってるって思ったんだよ。頭良いオッサンだったよ、まったく」

「だって真面目一本で歩いてきてたんじゃないの？ 真面目な人かしたら、私や平和さんみたいな人は狂ってるって思うのかもね」

「視野の狭いジジイだ」

私はベランダの上で大爆笑していた。隣の部屋のベランダには赤い染みが見える。おかしい光景、とぼんやりと思って、それさえも笑いを誘った。

すると、武藤さんは何かを見つけたようだった。そして、拾う。

彼の手には、赤く染まっているナイフ。まだ使えそうだと判断したらしい。

「あれ？」

「ん、もしかして？」

「あ」

「うわ、やりやがった」

「すごい勢いだったね。血が手首からどぼあ」

「いきなりリスカなんかすんなよな。死ぬつもりなら家で死ねよ」
「ほんとだよな。これ以上外に死体増やしてどうすんだろ」

ずるりと彼の身体は傾いて、どしゃ、と倒れる。まあ、良くある光景だ。たまたま今回は死体の名前を知っていただけ。それだけだ。面白い世の中になったものだ。これじゃ、何が狂ってて何が狂ってないのか分からない。高学歴を貫いた弁護士らしい元弁護士のおじさんは、公共の場でリスカをして、現役時代は先輩から狂ってると言われた似非弁護士は、まだこうやってベランダに立っている。変な世界。

この世界に絶望して、ああやって死ぬのが普通の反応なの？ 狂っていない人間は、公園で手首を切り裂くの？ それとも、死なない私たちが普通で、あの人たちが狂ってる？

この狂った世界に順応しているもとから狂っていた私たちと、結局、狂った世界に順応することが出来ず、狂いながら死んでいった彼ら。ねえ、一体どっちが狂ってるんだと思う？

人類が絶滅するまで、あと二日。

六日目 人間が思うほど未来は思い通りに行かないのである。

美世^{みよ}、と平和さんに名前を呼ばれた。美世。そういえば、小学生の頃、親に自分の名前の由来を訊いたことがあった。返ってきた返事は、確か。

「美しい世界で生きる事ができますように」

「はあ？ ……ついに、美世も終わったか」

「真面目な顔してそんなこと言わないでよ。私の名前の由来！」

「ああ、美しい世界？」

「そ。だから美世なの」

「あはは。そりゃまた、親も不本意だっただろうなあ。美しき世界がこんなになっちゃって」

「おもしろい親だよねー。今時、侍みたいな父親だったよ」

「侍！ すっげー！ それ、ぜひともあってみてえ」

「ああ、残念。うちの親は私が高校生の頃死んだんだよね」

「へー。そりゃまた。ご愁傷様」

「いえいえ。あっけなくも、交通事故でどかん。ぽっくりとね」

「美世の両親って言うから、殺しても死ななそうなのにな」

「どういう意味だこら」

手元にあった漫画本を投げる。彼の頭にクリーンヒットした。お、私コントロール良い！ 平和さんは、いて、と言って私を睨んだ。本当に痛かったらしい。大分目がマジだ。投げたのは雑誌タイプの分厚いやつじゃなくて単行本だったのだけれど、どうやら運悪く角が当たったらしい。平和さんって、実は不運な星の元に生まれてきたんじゃないかな、とたまにふと思う。だって私、狙って投げた訳じゃないのに。ちなみにどうでもいいけど、私が投げた漫画はある少年が海賊の王様を目指す漫画の二十三巻だ。

「……皮肉なもんだよね」

「ん、まーな」

「美しい世界、なんてさ。親もまた、見当はずれな名前をつけたもんだよ。嫌な名前」

「何だ？ やけに名前に拘るな」

そうかな。うーん、言われてみれば拘ってるかも。だって、昔から嫌いだったんだよね、美世って名前。言いづらいし、だいたい聞き間違えられるし、なんか変な理由だし。美しい世界、なんて。現実見ろって話だっつーの。

「つーかさ、別にいいじゃん、美世なんて。まだ別の意味にとる事もできるんだし」

「そうかなあ」

「俺なんて、平和ひらかずだぜ？ 平和。へいわ。そのまんまじゃねーか」

「ああ、確かにそれはキツイね」

「俺の親なんかさー、それはそれはお堅い人物でさ。あいつらの希望で、半ば無理やり弁護士になって」

「だから弁護士なんてやってたんだ？ なるほどね、納得」

「まあ、もう大分前に逝っちまったけど」

「それはそれは。ご愁傷様です」

「いえいえ」

「平和さんの両親なら、殺しても死ななそうなのにな」

「それはさっきの仕返しかな？」

まーね。私は適当に言葉を投げて、ベッドの枕に顔を押し付けた。隣で平和さんが何か言ってる。何故か聞く気がおきなくて、そっと目を閉じた。平和さんの声は聞こえない。彼も黙ったらしい。私は落ちていくとする意識の中でぼんやりとお父さんとお母さんを想像した。あれ、どんな顔だったっけ？ 確か、私の顔はだいたいお父さん似で、目元はお母さん似で……。だめだ。思い出せない。写真もないし、大分前だし。それからそれから、ええと。お父さんとお母さんはなんて言って死んだっけ？ 思い出せない。ああ、違う。突然死んだから何も言われなかったんだ。最後の会話も覚えてない。いつでも理想ばかり語ってる、馬鹿な父親だった気はするけど。

母親も母親で、いつまで経っても夢見てる万年少女趣味馬鹿だった。どうしてその二人から生まれた私がこんな捻くれてんだか。遺伝子って謎だ。

美世。美世、なんてさ。そんな名前をつけた両親は、気がついたら勝手に死んでたし。それに、お父さんとお母さんが望んでた、美しい世界なんて何処にもなかったし。世界はちよっとつつけばすぐ狂うくらい脆かった。まあ、前の世界が狂ってないのだとしたら、という仮定の下での話なんだけどね。

見てみなよ、理想主義のお父様お母様。美世は今こんな世界に生きています。死体と言う名前の、ただの臭い生ゴミに囲まれたボロアパートの一室で、これまた空き缶やら食べかすやらのゴミに囲まれたベッドの上で素っ裸で寝ています。これが今の私の美しい世界です。これが私の現実。こんな私を見たら、あんた達は泣くのかな。絶望するのかな。結局はそんなもんだったんだよ。

あんた達だって、本当は知っていたんでしょ？ この世界に美しい場所なんて無いって、本当は知っていたんでしょ？ だって、口では理想を語ってても、遺伝子は理想を語ってないんだもの。知っていて、娘の私に自分のうわべだけの理想を押し付けたんでしょ？ ねえ、そうでしょう？ ブレーキも踏まずにアクセル全開で建物に突っ込んでいったお父様お母様。ねえ、あんたたちはこの世界の何に絶望したんだろうね。

人類が絶滅するまで、あと一日。

七日目 人間が思うほど世界は絶対ではないのである。

「ねえ、平和さん」

「うんー？」

「今日で、世界は終わっちゃうね」

「そうだなー」

やる気の無い声が響く。いいのかな。今日で最後なのに、こんなんで。いやでも、私たちがいいっちゃらしいか。

「お腹空いたよ、平和さん」

「んー…：そうだな、最後だし、なんか作るか？」

「そうしよう！」

とは言ったものの、結局食べれるものなんてカップ麺と缶詰とお菓子だけなので、しょうがなくカップ麺を作る事にした。溜めてあった水を用意して、部屋に大量にあった紙を使って火を点けて、お湯を沸かす。お湯が沸いたら、カップ麺に注いで三分待つ。できあがり！

日本人ならば誰でも知っていることだ。でも、恐ろしい事に、私たちはそれを忘れそうになっていた。カップ麺なんて、しばらくスナック菓子としてしか食べていなかったから。人間、必要の無い記憶は忘れていくから。私に必要な記憶は、平和さんの名前だけ。他は何に必要なのかイマイチ分からない。

「わー。あったかい」

「な。そっか、カップ麺ってのは、本来こうやって食べるものなんだよなー」

「おいしそうって思ったのなんて、いつぶりだろ？」

箸を持ち、いただきます、と言って食べ始める。口に運ぼうとしても、熱くてなかなか食べれない。ふーふーして、ようやく口に入れることができた。口内に広がる、人工的なしょうゆ味。

実感した。美味しいな。美味しい。明日からは、こんなに美味し

いものを食べる事が出来なくなるんだ、な、んて、ね。

視界が滲んだように感じた。発砲スチロールで出来た容器が、歪む。茶色のスープと黄色い面が、霞む。そこから漂う湯気が、揺らぐ。

一際大きくゆらりと視界が揺れ、ふいに視界が鮮明になった。また歪み、そして鮮明になる。これを繰り返してうちに、だんだん咽喉が痙攣しはじめた。ひくっ、ひくっ、と嗚咽が始める。

——私、泣いてるんだ？

「……何、泣いてんだよ」

「わたし、も、わかんない……」

「何、今泣いてんだよ！」

「だって、だってえ……」

平和さんは、苛立っているようだった。こんなにキレてる彼なんて、初めて見た。いつも、どうでもよさげな表情しかなかったのに。

——ああ、そっか。彼も、私と一緒になんだ。

「平和さん、わたし、ね、」

「……ああ」

「死にたく、無いんだと思うの」

「……ああ」

彼は無感動に、箸を止めて言った。右膝を立てて、その膝に隠れるようにして頭を伏せ、悩んでいるように右腕で頭を抱えていた。

もしかしたら苦しんでるのかもしれないと思った。

もしかしたら泣いているのかもしれないと思った。

何も変わらない。私も平和さんも、人間だ。死ぬのが怖いんだ。怖くて怖くて、死にそうなんだ。死にたくないんだ。いままで、知ったような顔して、平気そうな顔して。分かってなかったんだ。こ

れからもずっと、この状況が続くように錯覚してたんだ。平和さんと一緒に、過ごすこの日常が、どこまでもいつまでも続いていくと、心の奥のどっかで信じていた。

嗚呼、馬鹿みたいだね。

「平和さん。私、今、生きてた」

「ああ」

「死んでない。今、美世っていう人間は、確かに生きてる。それでも、明日は確実に死んでる」

「……ああ」

「明日は、私生きて無いんだよ。怖い、死にたくないよお」

「……黙って、ろ。黙ってろよ、お前。んなの、前から……、分かってたことだろ」

「うん、うん、そうだよ……そう、なんだよね」

「お、まえ、ぜってー馬鹿、だ」

ほんとだ。ほんとだね。

私、馬鹿だね。馬鹿で愚かで、今まで私が毛嫌いしてきた他の人間と、何も変わらないね。そして多分、それは平和さんも当てはまるよね。

人間は総じて馬鹿なのだ。愚かなのだ。けれど、それは人間自身が決めることではない。一生懸命生きずに、高みの見物気取りで諦めている人間などに、人間の価値は決められない。私たちじゃ、人間を決めることはできない。

「平、和さん」

「……あんだよ」

「私、平和さんのこと、好きなのかもしれない」

「………無駄だろ、そんなの。もう、全部全部無駄なんだ」

うん、そうだね、無駄だよ。意味なんて、もう無いね。

でもね、一つだけ意味を望むとしたらね、私は『好きだった』にしたくないな。だってまだ、過去形じゃないから。例えば明日になっただって、それだけは過去形じゃないから。ならないから。

一週間前から、私は貴方が好き。今も、昔も、そして明日も。存在しない明日の中でも、私は貴方が好き。きっと、好きでいるでしょう。

「美世」

「うん？ 何、平和さん」

「きっと、今日から明日に行くことは出来ないだろうけど」

「うん」

「それでも明日、また会おう」

「そうだね。明日、また会おう」

きっと今日を越えられない。私たちは今日にとらわれ、死んでいく。明日なんてない、来ない。無駄だ。

このカップラーメンを食べるのも、無駄だ。明日への栄養を蓄える意味なんて無い。それでも、私は箸をとる。

無駄だ。明日なんてこない。今日を越えられない。また、会う事なんて出来ないのだ。そんなの、全部全部無駄だ。

ねえ、それでも。

———あした、またあいたいよ。

そして人類は絶滅しました。

何をどう足掻いたって世界は終わる。もう全部全部無駄、なのだ。すべてを諦めた無念を抱えて、私は今日、眠りに落ちるのだ。

決して朝が来ない夜がある。そんな夜だからこそ、今日は早めに眠りに落ちようと思うのだ。

私は、煙草を吸ってから、酒を飲んで。彼は、酒を飲んでから煙草を吸って。

確かに其の夜、星が見えたのだ。

空が埋まってしまうのではないかと言うくらいの、たくさんの星が見えたのだ。今、この日本に電気が無いのが理由かもしれない。だったら、今までの一週間も同じ星空が見えたのだろうか。知らなかったな。

そしてその後二人でベッドに入る。その後の流れはいつも通り。

其の夜、確かに星を見ることができたのだ。

疲れた身体をベッドに沈めて、彼の手を握った。彼も、握り返してくれる。

体温の低い掌を、決して離すまいと。貴方の愛しい掌を、眠りに落ちるまで決して離すまいと。

すべてを諦めた愛しさが胸に溢れだす。私は。

「おやすみさない、平和さん」

「ああ、おやすみ、美世」

Q もしも世界が終わるとしたら、貴方は一体何をしますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2859i/>

人類絶滅

2010年10月8日15時27分発行